

小塩真司著

## 『性格を科学する心理学のはなし』

血液型性格判断に別れを告げよう

評者 東洋大学経営学部教授 久保田進彦

縁あって、本号からブックレビューを担当することになりました。読者の皆さんにとって有意義なページとなるよう努力するつもりですので、どうぞよろしく願います。

※

さて初めに、このページで本書を取り上げる理由から説明する必要があります。あるだろう。表題からわかるように、本書は性格心理学の本である。しかし同時に、統計的妥当性に関する優れた入門書となっている。

妥当性とは「測りたいものがきちんと測れているか」ということである。「長さ」のように、目に見えるものを測るのは比較的簡単である。しかし私たちの身の回りには、目に見えないにもかかわらず、測りたいものもたくさんある。最近話題になった「幸福度」などは、その好例であらう。

目に見えないものを、いかにして正確に測るかという問題は、古くか

ら心理学者を悩ませてきた。彼らの研究対象は、「こころ」という目に見えないものだからである。またそれゆえに心理学者は、測りたいものがきちんと測れているか、すなわち妥当性というものに強い関心を寄せてきた。

実はこの問題は、私たち広告関係者にとっても無関係ではない。広告の力は消費者の「こころ」を動かすところにあるからだ。

私たちは、広告の成果を知るために「こころ」という目に見えないものを測らざるを得ないのである。

しかし、もしその測り方が、信憑性の低いものだったらどうであらう。誤った意思決定を導くだけでなく、取り返しのつかない結果をもたらすかもしれない。

このように妥当性について知るこ

とは、広告関係者にとって欠かすことのできないことなのである。

妥当性に関する本はこれまでもあったが、いずれも自ら調査分析を行う者を対象とした、専門性の高いものであった。しかし広告関係者の中には自分自身で調査を行うのではなく、むしろ調査会社や調査部門が行ったデータを参考にして、様々な戦略を策定する者も少なくない。本書はそういった立場にある読者が、調査の妥当性を見抜く力を身につけ、



新曜社刊  
192ページ  
税込価格 2,310円

味深いテーマが次々と展開される。もちろん一流の心理学者の執筆した著作であるがゆえ、その内容は単なる啓蒙書の水準に留まるものではない。

例えば評者が最も興味深く感じたのは、「家庭環境が子供の性格に与える影響はほぼゼロ」という知見である。これは「家庭環境が不要」ということではなく、ある子供には良い結果をもたらした環境が、他の子供にはまったく別の結果をもたらしてしまうということ、つまり家庭環境の与える影響の方向性は子供によってバラバラだということを意味している。

虐待のように、よほどひどい環境でない限り、家庭環境には「こうすればこうなる」という子育て法則は成り立たないわけであり、それゆえ「こんな育児環境を目指す」と良い「こんな育児環境を目指す」といいことにはなる。

情報環境の発展によって、多くの調査データに接するようになった今日、妥当性に敏感となるのは極めて重要である。本書はまさに時代が求める1冊といえる。